
俺と親父の迷勇譚

天犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と親父の迷勇譚

【Nコード】

N0350L

【作者名】

天犬

【あらすじ】

イケメン親父の息子でありながら全くその面影を持たないイケメン嫌いな主人公と、見た目20代、中身40代の外見年齢詐称男な親父様が異世界に飛ばされて魔王を倒しに行ったり行かなかったりするお話。

このお話は私・天犬の気まぐれと妄想を頼りにかかれております。：ので生暖かい目で、「しょーがない。ちっと読んでやるか。」てな感じで読んで頂ける心の広い方、大歓迎です。

※超絶不定期更新です。

prologue いたんですか…ええ、ずっと（前書き）

心の広い方、初めまして。

天犬です。

拙い文章、気まぐれ更新、プロット無しと……ああっ行かないでっ！！

と、とにかく突っ込み所満載なお話ですが、ドロンだけはやらないつもりですので、最後まで付き合って頂ければ幸いです。

では私・天犬の『小説家になろう』、初の作品。

“俺と親父の迷勇譚”ご覧下さい。

prologue ♪いたんですか…ええ、ずっと♪

Prologue

♪いたんですか…。ええ、ずっと。♪

1人、少年が森の中に立っていた。

とりたてて優れた容姿でもなく、かと言って醜いと言う訳ではない、そんな普通の少年。

あげるとするならば、髪と眼だろうか。

髪は貴族のように艶があり、眼は同年代のそれと比べ些か鋭すぎる。そして双方に共通するのが…「この国出身ならば」有り得ない色――全ての色を含むという漆黒である。

「ゴホン。あー、アアア」

急に少年が喉に手をあて、喋り出す。

周りに人影はない。動物さえない。

強いていうなら少年の周囲に生い茂っている木々。それが唯一の生命だった。

「本日ハ晴天ナリ、本日ハ晴天ナリ。皆様、ゴキゲン如何デショウカ。」

…で、あるのに少年は独り言にしては些か以上に大きな声で妙な片言言葉を喋って、否、叫んでいる。

「ゴキゲン良ケレバ、声ヲ掛ケテクダサレバ幸イデス。モシ悪クテ

モ、罵リナサツテ結構デスカラ、」

傍目から見れば、変人である。

紛うこと無き変人である。

平常の少年は真人間……なのかもしれない。

しかしながら今の少年には、そんな事は関係無かった。

例え、役人に「ちょっと君、」と声をかけられようが

例え、「ママ？変な人がいるよー？」「コラッ、みちやいけませ
んっ！」と後ろ指さされようが

今の少年には関係無いのだ。

たとい、少年が白い目でみられようと社会的地位が奴隷レベルまで、
墜ちようが。

今の少年には他人の存在がひつようなのだろう。

何故なら。

何故なら今、その少年は————

「誰か、返事しろ————！！！」

少年、只今絶賛迷子中。

最後の絶叫が静かな森に響き渡る。

反響すらない森の中。

ゼイゼイと肩で息をする少年に応える他人（こゝろ）などあるはずも無く。…
いや、無いと（少年が）困るのだが。

「くそ……人すらいな森だど？…ここは、どこなんだ…？」

なにやら考え込む少年を「木陰から見守る私」。

少年は先ほどから叫びまわったり、考えこんでたり、いきなり「じゅげむじゅげむ…」と呟いたりして傍目から見えて飽きないのだ…。

流石にそろそろしゃがんだままの姿勢が限界である。それに、立場上このまま傍観という訳にはいかないので、しょうがなく姿を見せる事にした。

一歩足を踏み出すと足元の枝がパキッと音をたてる。

その音に振り向いた少年は大木の陰から出てきた私を見るやいなや。

「誰だっ？…いつからそこにいた？」

と、尋ねてくる。私を見るその視線は鋭く、まるで剣先を向けられているような錯覚すら覚える。

先程までの喜劇の役者のような彼との差違に若干驚きつつも、私はできるだけ警戒を解かせようと、声を和らげ答えた。

「私はヨウシア・アグレスと申しまして、カルトウス帝国魔法騎士団……の騎士団長を務めております。」

「は？テイコク？ウィザードナイツ？」

「はい。カルトウス帝国魔法騎士団、騎士団長を務めさせて頂いております。」

私がそう答えると、少年は額に手をあてて空を仰いだ。

少年が何も言わないので、続けても？と問うと、首を縦に振った。それを見て、再び私は口を開いた。

「失礼ながらあなた様の挙動を監視させて頂きました。」

「マテ」

「…はい？」

早速割り込まれたので、疑問の声をあげると、少年は腕を組み目を細めた。

「いつからだ？」

と。これは恐らくいつから監視していたのか、という意味だろうか、

「最初から。」

あなた様がいらっしゃった、その瞬間からですね。」

と、私がそう応えると、少年の頬がひきつった。

「じゃ、じゃあ何か？俺がついた時も、奇声をあげていた時も、そばにいたってことか？」

「ええ、ずっと。」

それを聞き少年の肩がガクツと下がる。

…というか奇声って自覚があったんですね。

そう内心で苦笑しつつ、私は森の奥を手で示す。さながら、案内をする給仕メイドのように。

「いらっしゃいませ、そよ風靡き水面たゆたう都ハーツへ」

少年が顔を上げ、私をみる。

そして、最後の私の一言に表情を凍らせた。

「そして、新天地いせかいにようこそ、勇者殿。」

少年——私が喚んだ勇者は、

「嘘、だろ…」

そう言って仰向きに倒れた。

prologue ♪ いたんですか…ええ、ずっと ♪ (後書き)

prologue、読んで頂きありがとうございましたー。

見事なまでに、『親父』『イケメン』のワードが出てきませんでしたが、大丈夫です。次話にでます。

……たぶん。

無茶苦茶に短い初投稿でしたが、ご意見・ご感想などあれば、ドシドシお寄せください。

や、でもお手柔らかにお願いしますよ？

→

へたれ

では。

次回……何時になるかわかりませんが
また会いましょう。

第1話 ♪いいひ、たびだち♪（前書き）

帰って参りました。

……一年ぶりに（汗

ブログだけのこの小説、だれも読んでないよねえ。なんて思っていたら、お気に入りに入れて下さった方が。

godacceleさん、名も知らぬ方、お2人共ありがとうございます。

第1話 ♪いいひ、たびだち♪

第1話

♪いいひ、たびだち♪

遡ること一時間前。

俺はとある公園の噴水の縁に腰掛け、辺りをぼうつと見渡していた。
春特有の程よい日差し。

舞う桜の花びら。

人々の心も緩み、緩みすぎてくるくるぱあになっちゃう人もいるそんな季節、春。

ここはとある一組みのカップルが電車男も真っ青な出会いを果たし、
はなだん花男もビックリな運命を乗り越え結ばれた……という信じがたい噂
で有名な公園である。…当然、そんな伝説にあやかろうとする、カ
ップルが多いわけで。

あちらに一組みそちらに一組み。

視線をどこに向けてもカップルが眼に入る。……しかも中には所謂、
バカカップル、という奴らもいるわけで。

「ねえ、シゲキ？ クリームついてるよ？」 「へ？ どこだよ？」 「こ
こ！ パクツと」 「なっ！？ 何やってんだよメグミ！！」 「恥ずかし
がってるゝ可愛いゝ」

——この世から塵も残さず消してやろうか………！！！！

目の前の糖分300%の光景に、思わず手に力が入り、持っていた

缶ジュースがピキッと悲鳴をあげる。

……ハッ！いかんいかん。

あまりのバカッフルさに我を忘れる所だった。

俺は改めて周囲に目をむける。

さっきのとはいかないまでもバカッフル、バカッフル予備軍があちらこちらで目に付く。

俺はふうとため息を漏らし、晴れやかな笑顔を浮かべた。

そう、笑顔。

ラヴアンドピース。

怒りに心を奪われてはいけないのだ。

そしてその境地に至れば、俺の口からは、自ずと俺自身の純粋な感情がでるハズ。

「みんな、死ねばいいのに」

……出ちゃった☆

皆さん、こんにちは。

イケメンは死ねばいい、がモットーの、萬^{よろずや} 虎雨^{こいうめ}でございます。

「……まーた笑顔で何物騒な台詞吐いてるんですかアナタは。」

心のお客さんへの自己紹介に割り込んだ、溜め息混じりの声に振り向くと……そこにはスーパールの袋を抱えた美青年^{イケメン}が。

そいつを視界にいれた、その瞬間俺の体は動いていた。

俺の拳が火を吹くぜ！！

「死ねえ！！」

「はい！？」

イケメン野郎は慌てながらも飛び退き、俺の拳は奴に当たる事無く宙をかいいた。

「何するんですか！」

「条件反射だ！文句あつか！！」

俺の攻撃を難なく避けやがったイケメンは、買い物袋を地面に降ろしながら、

「無いとでも思いましたか？有りすぎてどれから言うべきか迷う程ですよ？」

と有り難い説教をくれた。

イイ迷惑だ。

そんなおれに気付いたのか、まったく、とまたも溜息。

そして、

「私はあなたの実父なんですよ？手を出すのをちょっとは躊躇いなさい！！」

とお怒りである。

そう。

この見た目20代前半の優男の正体は、実年齢48才の紛うこと無きオッサン。

そして、俺の同居人にして、保護者。

早い話が、俺の父親なのである。

「認めん…俺は認めんぞ…!!」

「諦めなさい。戸籍上だけでなくDNA上でもあなたは正真正銘の私の息子です。」

俺が呟くも、親父はそう言ってレジャーシートを手頃な木の下に敷いている。

……これくらいで俺の愚痴が終わったと思うなよ…!

「うるさい!じゃあ何でこんなに似てねんだよお!??」

この年齢詐称男はモデルも真っ青なぐらいの美形である。

美形である、が!しかし!

その息子である俺には何の恩恵も無い。

つまりは、遺伝されてないのだ。主に顔面が。

「……男は見た目じゃありません。中身ですよ、虎雨。」

「……………ほう?」

いくさったなジジイ。

「……バレンタインデーだけでは飽きたらず誕生日、果ては父の日に至るまで何かしらの機会に、チョコやらプレゼントやら花束やらを貴様は毎年もらっているな?」

「……そう、ですね。」

オイ、こっちの眼え見て返事しろや。
まあいい。続けよう。

「その、贈り主。普段付き合いがある人は一体何人だろうなあ…。」
「……それは、勿論知り合いの方ばかりですよ。」

その知り合い、一回しか会ってないって人も相当いるだろうがよ。
……まあそれもいい。
問題は。

「メッセージカード。」

俺の一言にピクリと親父の肩が揺れる。

「俺の記憶じゃあ8割、いや9割が贈り物に添えられたメッセージカードに『一目惚れしました♪』って書かれてあったような……?」

親父の頬に流れる一筋の汗。
あんたって汗かかない方だったよな?

「更に言うのだ。俺に話しかけてきたり、遊びに誘ってきた女の子の内、全員が贈ってたよな? プレゼント。」

全員だぜ?

俺の女友達、その全てが親父に近付く、ただその為に俺に話しかけてくるんだぜ?

「……し、しかしですね、虎雨。アナタも貰っていたでしょう?」

親父がとうとう耐えられなくなったのか、反論してくる。確かに親父の言うとおりだ。

「確かに貰ったな。」

「ほら、あなたも同じように好かれて「思い出したように翌日」かにな。しかも市販。」……。

しかもこれは母親込みだった所がミソだ。想像してみてください。自分の誕生日。

本来ならば待ち遠しく、楽しいはずの特別な日だ。しかし、誰にも気付かれることなくその日をおえる。

何故ならばその日は親父の誕生日でもあるからだ。うずたかく積まれるプレゼントやケーキ。しかしそれは自分宛では無い。母親は俺には気付かず父親の為のケーキを作った。自分の友人達（女）ももちろん俺に気付かない。……幼なじみ？んなもんいねーよ。

そして翌日、母親が「ごめ〜ん忘れてた☆」てな感じで、市販のケーキを買ってきていた…。

それが“親父が最大の恋敵”と揶揄される俺の経験だ。

結論。男は顔だ。

「……………さあ！！そんなことより、花見ですよ！ご飯ですよ！」

ごまかしたな？

「……………まあいいや。」

俺は箸を取り、親父がひろげた弁当に手を伸ばした。

昼飯を食べ始めてから数十分後。

食休みに入っていた俺はおもむろに立ち上がった。トイレに行きたくなったのだ。

親父がどうしたのか？と目を向けてきたので、理由を伝えると、

「なら近くのコンビニに行った方がいいですよ？」

と言ってきた。

「この公園にトイレなかったか？」

「ありますけど…並びますか？」

「は？」

親父が指さすほうを見ると、ずらりと並ぶ男達。バカップルの片割れ共が列をなしていた。

「……めんどくせえ。」

俺は親父に背中ごしに手を振り、公園をでた。

俺は公園をでて、歩いてコンビニに向かっていたのだが…。

「あつれ……？　ここらへんに……。」

迷った。

いや正確に言うとは道に迷ったわけじゃなく、コンビニの場所が分からない。普段行かないからなあ……この辺のコンビニ。

「参ったな。」

俺がそう呟いた、その時だ。

《みいつけた》

声が、聞こえた。

澄んだ鈴のような綺麗な声が。
幼い子供のような口調で。

「……は？」 辺りを見回すが、誰もいない。

「……気のせいかな？」

《みいつけた》

2度目。

聞き間違いじゃ、無い。
けど周りには誰も……

「……いや、ちょっとまで。」

今は昼だぞ？こんな通りに人がいないなんて……

《みいつけた》

駄目押しの三度目。

「何をだよ。」

俺が半ば反射的に呟くと、

《“いれもの”》

と、ご丁寧にも返事がきた。

“いれもの”ね……。」「

《わたしを、いれる、いれもの》

……声が近くなってきている気がする。
どこから……？

《……だから、きて。わたしたちのところに》

誰かが言い終わるか終わらないかの内に、俺の足下が白く輝く。

「なあっ!?!」

あまりの眩しさに目をつむる。

そして訪れる浮遊感。ついで回転。体がもみくちゃにされるのを感じながら――若干吐きそうになるのを何とか抑えて――しばらくじっと耐えていると、回転が止み、重力が戻ってきた。

足が固い何かに着いたのを感じ、恐る恐る目を開けると……そこには

「……森い!?!」

街並みではなく、青々と茂る森が広がっていたのであった。

第1話 ♪いいひ、たびだち♪（後書き）

これからはちよくちよく更新していくつもりです。

……頭に『比較的』とつきますが（汗

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0350/>

俺と親父の迷勇譚

2011年10月6日14時22分発行